

どうなる？

新しい社会科

新学習指導要領が求める地図帳の使い方③

3つの地球儀指導で世界を教える——なぞる・回す・測る——

愛知教育大学人文社会科学系教授 寺本 潔

新しい小学校学習指導要領で地球儀指導が強調されている。実は小学校の教育現場では正直なところ過去30年間地球儀指導が軽視されてきた。昭和52年度版の指導要領以降、それまで小学校社会科で人気だった単元「気候に適した外国の暮らし」がなくなったからである。もちろん、日本の食料生産や工業生産の単元で、輸出・輸入に触れたり、シルクロードやペリー来航など歴史上外国とのかかわりの場面で地図帳に載っている世界全図を登場させたりはしてきたものの、地球儀そのものを扱う場面がほとんどなかったのではないだろうか。その証拠に経緯線や赤道、北極点・南極点、簡単な時差に関する知識（地球の自転により裏側は昼夜が逆）は、現在の小学生には全くといっていいほど保有されていない。世界全図で世界を平面的に捉えがちになっている。球面である地球儀は、正しい世界の姿を知る上で大切な教具であることを改めて教える必要がある。

ところで、30年以上前は、両極付近にギザギザに切り込みが入った世界全図をハサミで切り開き、糊で白い球面に貼り合わせる作業学習もあつたくらい重要視されていた。もち

ろん、経緯線や緯度・経度の意味も扱っていた。地球儀に十字のテープを貼り付けて、日本の真東にアルゼンチンがあることをつかませる指導も行ってた。これらの指導内容を復活させることも大事であるが、本稿では筆者が考案した簡便な地球儀指導術を三つだけ紹介してみたい。

球面を「なぞる」指導

本誌の前号で指旅行の手法を解説したが、地球儀でもひとさし指は大活躍する。5年生の国土学習に「世界の主な大陸と海洋、主要国の名称と位置」が新たに入ってきたが、指で大陸の輪郭をなぞらせる指導こそ、効果抜群である。



まず、教師自身も地球儀上で日本列島を示しながら、「日本列島は四つの大きな島から成り立っています。四つの島をなぞってみま

しょう。また、北海道の東や九州の南にも小さな島が連なっていますね（千島列島と南西諸島を確認）。それらは弓なりに連なってい

て、中国やロシアがある大きな陸地（大陸と呼ぶことに触れる）とは異なります。」と説明するのである。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』 p.12

その後で、ユーラシア大陸から順番に各大陸の輪郭をなぞり、その位置と大きさを指先と視線で捉えさせる。大陸が終わったら、三大洋も同様になぞらせ、六大陸名と三大洋名の合計九つの地名知識を確実に保有させるのである。

地球の番地を探る上で重宝する経緯線も「なぞる」学習に適している。地球儀を回転させないで緯度0度の赤道をなぞらせ、「指

が一周しましたか？」「この線を赤道といいます。最も緯線の中で長い線です。」と解説。次に0度の経線である本初子午線に注目させ北極点から南極点までなぞらせる。「この線はイギリスのロンドン市にあるグリニッジという町の天文台を通っています。」ここに経線0度を引かせたとき、イギリスは大英帝国と呼ばれ世界一の力を持った国だったので。」と説明すればさらに興味を抱くだろう。

「回す」指導

本初子午線をなぞらせたら、いよいよ地球儀を「回す」場面である。このとき、4人組になって、1人が本初子午線と赤道の交点（経度・緯度ともに0度）に指を置き、反時計回り（西→東）に地球儀をゆっくり回転させるのである。あくまでも指は地球儀表面にくっつけて動かさないことがポイント。もう1人には、北極点付近を指させて目盛を読ませつつ回す。さらに、3人目には黄色いテニスボールを遠くに見える太陽になぞらえ、地球儀から2mほど離れて立たせるのがコツ。立つ位置は、前の2人がいない側が適している。4人目の児童は全体の様子を観察させる



「測る」指導

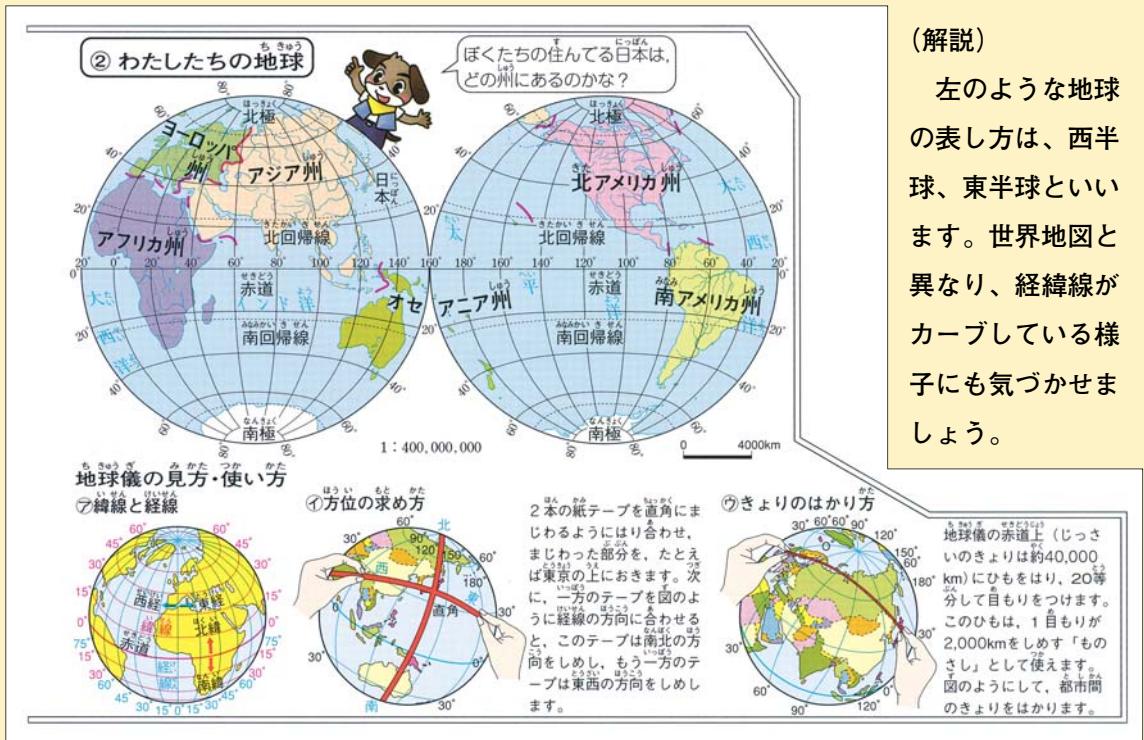
地球儀上で距離を測る指導も大切な社会科学学習だ。地球の外周は約40000kmであるため、北極点と南極点をぐるっと結ぶひもを持ち出して、20等分してみる。そうすれば、1目盛が2000kmとなり、物差しとしてその

とよい。

指導の順番は次の通りである。まず、赤道に指を置いた児童に「君の指の爪に目玉が付いていると想像しなさい。その指人間はアフリカのガーナの沖合の経度と緯度が共に0度の船にいます。地球儀が回りながら、いつ太陽であるテニスボールが見えてきましたか？」と切り出すのである。おそらく自分の指の近くに目を移動させて地球儀の回転に合わせて体ごとじりじりと回るだろう。「あっ、今見えてきた！」とつぶやいた瞬間に「その時が日の出です。」と解説する。2人目の児童にその時動いた経度の量を読ませ、「90度少し動いたときに太陽が地球儀の向こう側から見えてきたのでは？」とつぶやかせることができれば、大成功である。

ひもを活用できる。さっそく東京—ブラジル間や東京—ロンドン間の距離（大圏コース）を測ってみよう。東京を中心にして等距離の都市もわかってくる。

次に、ひもを大陸の輪郭に合わせてテープで貼り付ければ、おおよその大陸の外周の距離を測ることができる。海岸線が最も長い大陸はどこかがわかってくるだろう。



(解説)
 左のような地球儀の表し方は、西半球、東半球といえます。世界地図と異なり、経緯線がカーブしている様子にも気づかせましょう。

『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』 p.48

🌐 主な国の位置と名称の扱い

『指導要領解説』によれば「近隣の諸国を含めてユーラシア大陸やその周りに位置する国々の中から10か国程度、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアなどの大陸やその周りに位置する国々の中からそれぞれ2か国程度を選択することが考えられる。」と記されている。この指導の場合は、地球儀よりも世界を一覧できる世界全図の方が使いやすい。しかし、地球儀でも主な国の位置を指で指させて確認させておきたい。なぜなら、地球儀こそ、国々の面積を正しく把握させることができるからである。

「ロシア連邦やカナダって世界地図ほどは広くないね。」「有名な国はヨーロッパに多いけど、地球儀で見ると狭い範囲に集まっている。」などといった気づきができれば嬉しい。

国の選択に当たっては、①日本と同じ緯度帯（択捉島—沖ノ鳥島）に入る外国、②同じ経度帯（南鳥島—与那国島）に入る外国、③日本の正反対の地球の裏側（アルゼンチンなど）、④アフリカ大陸南端の国、⑤赤道が通る国などの視点で選択し、それらの位置と名称、国旗などを扱うとよい。

なお、地球儀の体感的な指導法については、寺本潔編著『プロが教えるオモシロ地図授業』（明治図書）を参照して頂ければ幸いです。